

井上ひさし氏 講演会

「本との出会い」

日時：1998年5月21日（木）
午後2時30分～午後4時

場所：和泉図書館第2閲覧室

司会 本日は、多数のご参加をありがとうございます。只今より図書館講演会を開催いたします。私は進行を務めさせていただきます図書館庶務課の藤田晶子です。よろしくお願いいたします。（拍手）

井上ひさしさんは、大変お忙しい方でいらっしゃるに、2年がかりで準備をすすめ、実現したものです。それだけに本日、こうしてお忙しいなか、時間をつくっていただきましたことを大変嬉しく思っております。厚くお礼申し上げます。

井上さんのお話に先立ちまして、後藤総一郎・図書館長よりご挨拶申し上げます。

後藤 こんにちは。きょうは、井上先生をお迎えして、皆さんにたくさん本を読んでもらおうと、「本との出会い」を先生にお伺いして、皆さんの心の糧にさせていただければということで、図書館の閲覧室で講演会を行うという新しい試みで、皆さんと一緒に先生のお話をお聴きしたいと思います。

本を読むこと、そして心に刻むことが、どういうふうに変えていくか、ということ、昨年出されました先生の『本の運命』を題材にしながらお話をさせていただくということでございます。しっかりと聴いてください。

司会 今回の講演会開催に当たりましては、井上さんと親しくおつき合いをされておられます政経学部助教授の生方先生に大変なご尽力をいただきました。心より御礼申し上げます。生方先生から井上さんのご紹介をお願いします。

生方 「親しく」なんということではなくて井上先生は、私が、本当に尊敬申し上げる大先生です。

時間が限られておりまして、この会場のあとすぐほかのところへ移られるということで、できるだけたくさん井上先生にお話いただくために、簡単にお話させていただきます。

きょう、皆さんのお手元に「井上ひさし プロフィール」という3頁分のものがありますが、これ、私がつくってみたものですが、これをもとに簡単に紹介させていただきます。

山形県の川西町、これは米沢市から西のほうへしばらく行ったところにあります。そこに図書館「遅筆堂文庫」というのがあります。“遅筆堂”というのは、井上先生のペンネームといいますか、ペンネームじゃありませんね、号ですか、しばしば完璧な作品を目指して芝居の初日に遅れるということもあるということで“遅筆堂”という名前が付きまして、それに因んだ遅筆堂文庫という図書館があります。井上先生が買われてお読みになられた本、数年前で17万冊ですか、それを全部寄贈されて図書館ができた。すごい図書館です。この機会に、いろいろな“読書の世界”に親しんでいただくとともに、“井上ひさしの世界”にも親しんでいただくということですので、この川西町の遅筆堂文庫もご紹介させていただきます。

それから、年一回この川西町で「生活者大学校」というのが開かれております。これも大変面白い学校でして、大学とは違った面白い勉強ができるところで、私も何度もそこに参加させていただいておりますけれども、そういうような学校も開かれております。

それから、主な著書ということでズラリと並べてありますが、これで全部というわけではありません。私は、これを全部読んでおりますけど、これだけではないんです。膨大な作品を書かれております。遅筆どころか、ものすごいスピードでお書きになられるということだと思っております。小説がもちろんたくさんあるのですが、それとエッセー、日本語論、特に農業

論には非常に面白い作品があります。本の題名で見当つけていただければと思います。

この講演を機会に“井上ひさしの世界”に少し入ってみようという方がいらしたら、こういうものがあるよ、ということで作らせていただきました。特に学生の皆さんは文庫本が簡単に手に入るだろうと思ひまして、文庫本の一覧表を出しておりますが、これは全部いま買えるというものではありません。絶版の本もかなりあります。そういう場合には古本屋を回る。そういう楽しみもあるかと思ひます。

そういう本の世界と、もうひとつ井上先生は「こまつ座」の座つき作者として戯曲をたくさん書かれております。本の世界も素晴らしいのですが、芝居の世界も大変面白いですね。

何年か前に初めて井上先生が明治大学で講演してくださったときのテーマが「演劇について」という題でした。それ以来、私は、芝居、井上戯曲も全部観ておりますが、芝居ばかりは、芝居そのものは図書館に行ってもないんですね。戯曲はあります。観ることのできる芝居は未来形でしかない。ということで、これから上演予定の「人間合格」と「父と暮せば」、この2つも紹介してあります。

但し、先ほど「こまつ座」のほうにお伺いしましたら、「人間合格」のほうは、ほとんど切符が売り切れの状況で、ほんのわずかだけ残っているということですので、興味がある方は、なるべく早く連絡されたらよろしいかと思ひます。「父と暮せば」のほうは、まだ余裕があるようです。

以上、簡単ですが紹介いたします。(拍手)

司会 ありがとうございます。それでは皆さん、大きな拍手をもってお迎えください。よろしくお願ひいたします。(拍手)

「本との出会い」

井上氏 明治大学には大変あこがれがありました。文芸科というのが昔ありまして、そこに入りたいたいと思ひていたときもありましたが、私が最終的に入りしたのは上智大学です。そこが奨学金をくれる。明治大学はもちろんくれませんので、そっちへ行っちゃった。それから、私の尊敬す

る劇作家に明治大学の出身者の方が多いのです。唐十郎、川村毅とかですね。現に大学で演劇活動をなさっている方もいらっしゃると思いますが、明治大学の演劇のレベルは非常に高いということは、知らないのは皆さんだけで、天下の認めるところであります。そういうところへお招きいただきましてお話できるというのは大変光栄です。

「本」と私の付き合いというのは、よくよく考えてみると、あまり面白くないんです。自分だけが面白いだけで、自分の楽しみを皆さんに押しつけてもしょうがありませんので、本というのは私たちにとってどういうものか、というのを少し外側から考えてみたいと思うのです。

皆さんは、それぞれ大きくなられて、脳の重さはだいたい平均1,400gのところですよ。もちろん人によって重さは違いがあります。女性の場合は多少脳の体積が少ない。これは<身長×8.5>というのが脳の重さですから、べつに脳が少ないからいけないとかそういうのではなくて、身長に比例して脳が大きくなる。そういうことなんですね。

この脳が、赤ん坊のとき、お母さんの胎内から私たちが出てくるときに、その重さはどれくらいかといいますと、だいたい350gです。350gといいますと抽象的でよくお分かりにならないと思いますが、ちょっと大型のずんぐりした清涼飲料水の缶がありますよね、ビールの缶でもいいです。あれを今度お飲みになるときに、印刷されているところをお読みください。だいたいあれは350g前後です。350ccです。ですから、私たちが生まれてきたときの脳の体積(重さ)というのは| | 体積と重さを一緒にしてまずけど間違いないと思ますが| | だいたい350g前後なんです。それが、皆さんのお年になりますと1,400g。つまり4倍ぐらいに増えてしまうわけです。増えてしまう、というのもちょっといい加減な言い方ですが、増えます。

こうしたことは全部、やはり本から勉強するわけです。僕は、実験室や解剖室にもぐって自分で確かめたわけではなくて、いろんな本を参考にしながら、自分だけの知識を組み立てていくわけです。

チンパンジーというのがいますが、このチンパンジーくんの生まれたときの脳の重さは350gなんです。つまり、チンパンジーと人間は、生まれたときの脳の重さは同じです。ところが、チンパンジーくんは、その後1

年か2年ぐらいの間に450gぐらいになります。そして、彼らの脳はそこで生育が止まります。チンパンジーくんは、\くん”をつけているのもへんですが、チンパンジーは、脳が8割方できたところでお母さんの胎内から外界へ出てくるわけです。ですから、すぐ物をつかんだり、立ったりできるわけです。

ところが、人間の赤ん坊は、脳がまだ25%ぐらいしかできてないときに外へ出てくるわけです。ちょっと早まったのじゃないかという気もしますよね。もうちょっとお母さんのお腹の中でゆっくり、脳がちゃんと大きくなるまでいてもいいんじゃないかというふうに思いますが、どうもそうもいかないらしいんです。

といいますのは、お母さんの恥骨というのが非常に狭いんです。見たわけではありませんが、そう書いてあります。『産婦人科全書』という50巻ぐらいの、産婦人科のお医者さんが分からなくなったときに参考にする専門書があります。こちらにあるかどうか。うちにはあるんです。写真目当てで買ったんですが(笑)、全然あて外れで、病気の写真ばかりで、何も面白くないんですが、かえって夢に見るぐらいなされたりしますけれども、そういう本を一所懸命読んで勉強していきますと、人間の赤ん坊の脳は350g。つまり、1,400gになるまでにははるかに遠い25%ぐらいしかできていないときに生まれるしかないんです。

というのは、お母さんの骨盤を子供が通るときに、これは皆さん、我々は全部そうやってきたんですが、回転しながら生まれてくるわけです。脳は鎧みたいに骨が重なってますから、赤ん坊もお母さんのお腹から外に出るときには、ちょっと極端ですが、脳をハムみたいに細長くしまして、お母さんの恥骨の溝に合わせながら、回転しながら生まれてくるわけです。お母さんたちは、我々を生むときにすごく苦しむわけです。その痛み、つまり陣痛、これが普通平均150回~200回といわれてます。それが、実は赤ん坊を、お母さんの恥骨の出来具合に合わせながら頭をネジの頭にして、その陣痛の力で外に出てくるわけです。赤ん坊にきいたわけではありませんが、これは大変につらい。世の中で一番つらい体験らしいです。らしいです、というのは証言した人が誰もいないんですね。みんな忘れてますから。

今まで、いろいろ雑音は聞こえますが、とても暖かいところにいた。それがいきなり大変に明るいところへ、寒いところへ、一気に出てきますので、赤ん坊というのはスキーのジャンパーと同じように、ジャンパーも一瞬踏み切ったとき、船木選手も言ってましたが、ほんの0.1秒ぐらい失神するそうです。というふうに、赤ん坊も、この世に生まれてきたときに失神するわけです。それぐらい厳しいところへ出てしまうわけです。そして、鼻にも、口にも、羊水というのが入ってます。お母さんのお腹の胎盤の中の羊水というのは、ウンチしたりオシッコしたりしたとき、羊水が受け止めて、それをきれいにして、という……。詳しく言わないでも、皆さんご存じだと思いますが、あるいはこれから知ることになることだろうと思いますが、それが口と鼻に詰まっておりますので、まず赤ん坊に呼吸をさせなければいけません。それで逆さに吊るして、口と鼻から羊水を出す。そのときに初めて赤ん坊は最初の呼吸をして、最初の空気を吸う。そして最初に吐き出すのが、赤ん坊の呱呱の声というやつです。「アーン」と泣きますが、あれが泣いて、初めてお医者さんたち、看護婦さんたちは、ああよかったというふうにお考えになるらしいです。やっと呼吸ができたということになるわけです。

こうして私たちは、ほとんど未成熟なままこの世に生まれてくるわけです。それはお母さんの胎盤の大きさ、あるいは恥骨の関係で、しょうがなく、まだできてないうちに生まれてくるわけです。ですから、人類というのは、本質的に未熟児たちなんですね。私たちは、半人前どころか、4分の1人前で外へ出てくるわけです。



(こういう180度に広がったところでお話をするというのは、非常に難しいといいますが、落ちつかないので、多少そわそわしております。これ、どこから敵が攻めてくるか、よく分からないんです(笑)。正面だけだと、どんな防御もできますが、目の届かないところから、特に後ろから、べつに誰も来ないのですが、来る可能性もないではないものですから、非常に落ちつかないできょろきょろしてますが、だんだん慣れてくると思います。)

ここからちょっと大事なことです。つまり、チンパンジーは8割方脳が完成して、それからこの世に生まれてくる。ですから、あとの2割は足りませんが、ある程度のことを自分ですぐちゃんとやれるようになりますが、人間は、いまどく申し上げましたように、25%ぐらいしかできていないところで外に生まれてきますから、ここで大切なのは、生まれてきた赤ん坊に、周りが母親の胎内の代わりをしてあげるといことなんです。これがとても大事なんです。

ここまでは全部、本の知識です。間違っていないと思います。間違っているとすれば、僕が参考にした本が間違っているだけで、これは私の半世紀に及ぶ産婦人科の本の、これは娯楽ですけども、一所懸命読んだ結果です。僕は、産院の芝居を書きたいと思っていますので、助産婦さんも及ばないぐらいの勉強をした結果、こういう知識を得たわけです。

ここから、多少私自身の体験や、私自身の考え方が少し入ってきますが、皆さんが生まれるずっと前、昭和30年代ですから、1960年代ぐらいに、当時まだNHKにお金がたくさんあった頃、ラジオの番組で大変な番組がありました。それは、昭和33年の4月1日に生まれた子ども(赤ちゃん)、全国で何万人と当時いたんですけども、その中から10人の赤ちゃんをNHKが選んだわけです。それでアナウンサーにしたかということ、そういうことでもないんです。赤ん坊が、0歳から5歳まで、どういうふうにして言葉(言語)を獲得していくかという大実験をしたんです。

実験をしたといいますが、ただ、そのうちの茶の間にマイクを備えて、当時まだテーブというのが大変貴重な時代でしたけれども、その家にもちろん録音機もちゃんと常設して、その方々の協力を得ながら24時間、赤ん坊のそばに必ずマイクがあったという状態をつくった。東京の

赤ん坊もいましたし、九州の赤ん坊もいました、北海道もいました、東北も、全国10人の赤ん坊を有名順に、べつに赤ん坊は有名でも何でもないですから、適当に協力してくれそうなところへお願いをして、5年間ずっと録音を録ったんです。お母さんから生まれてきたその瞬間から5歳、保育園の年中組くらいですね、そのときまで、どういうふう言葉を獲得していくのだろうかという大実験をして、それを区切り区切りで放送したことがあります。「言葉の誕生」という大変な番組だったんです。私も、そのライターといいますが、構成者の一人になって参加しておりまして、そのときに大変いろんなことを勉強しました。

それをちょっと申し上げますと、生後6か月～生後1年までの6か月間、これは皆さんご存じの喃語期なんごごといひまして、このときの赤ん坊の脳の中は、いかなる言語にも、どんな言葉にも太刀打ちできるといひますが、まっさらなわけです。

皆さんご存じのアメリカの有名な言語学者でチョムスキーという人がいますけれども、その方の意見というのは、まだそのころ我々は聞いていませんでした。聞いていませんでしたが、あとでチョムスキーの本を読むようになって、我々がやった5年間の仕事と同じ結論が出ているんだなというように感じましたけれども、喃語期の赤ん坊は、あらゆる言葉に対して対応ができるわけです。何も書き込まれておりませんので。つまり、脳神経がつながっていないわけですから。

三島由紀夫さんが「生まれたときのことを覚えている」と書いていますよね。そういうことは、絶対あり得ないです。多くの場合、お母さん、お祖母おばあさんに、あとから聞いたことを自分も体験したかのように思い込んだにすぎません。それを、俺は覚えているということになるのですが、脳神経がまだそういう連絡をしてませんので、あり得ない話です。

それから、ちゃんと勉強しますと、前世の生まれかわりとか、前世の記憶なんというのは、これは絶対あり得ないことです。それは脳の入門書をきっちり読めば、それははっきりしています。それは大きくなったときにどこかで吹き込まれたことです。

臨死体験にしても、あれも絶対へんですよ。自分がいて、スーッと自分から魂である自分が抜け出して、部屋の隅の天井のほうからじっと見てい

る、というのは誰かが言ったんですね。誰かが言ったのを、みんなそれを何となくピンときて、そういうふう^に作っていく。みんなで作ってられる。おとぎばなしですね、臨死体験というのは。

僕の臨死体験は、手術室に運ばれるときに麻酔が効きだす寸前に、シベリアの白樺の林の中をソリに乗って、シャン・シャン・シャン・シャンと気持ちのいい音が聞こえてくる。僕は、死に損なったことがあるんですけども、そのときに急遽手術ということで運ばれたときに微かに記憶しているのは、モルヒネが非常に効いて、モルヒネってほんと気持ちいいんですね。病気になったら、手術も全部お断りして、とにかくモルヒネで、モルヒネ中毒で死にたい(笑)。ものすごい痛いわけですけど、あれを脊髄に注射されますと、このへんからスーッとコココーラが体に入ってくる感じで^{すがすが}清々しくなってくるんです。痛みがなくなる、気分はいい。あれは最後の楽しみにとってあるわけですが(笑)。私の場合は、臨死体験に準ずるものはシベリアの光景で、白樺並木を……。あれは、僕らの若い頃の流行歌の影響なんですね。あるいは、歌声喫茶が何かでトロイカなんかを歌ったその印象で、白樺並木を馬車でシャン・シャン・シャン・シャンと行って、きれいで、湖があって、それが私の臨死体験ですから、部屋の中にスーッと抜け出して、部屋の隅で見下ろして、なんてことは僕の場合ありません。

私たちは、読んで考えて、読んで考えて、ちゃんと合理的に考えていかないと、いきなり分からないから非合理のところへポーンと飛んじゃうというのは非常に危険です。これは老婆心といいますが、じじいですから、老爺心と言うんですかね、付け加えておきますが、生まれたときのことを覚えている人はいない。それから、前世の記憶があるなんというのも全くウソです。それはあり得ません。それは脳ができてくるということ、ちゃんと考えて勉強すれば、そんなことは絶対あり得ないことは明らかです。

ということで、実験に話は戻ります。NHKの5年間の実験で、最初にちょっと述べましたけれども、赤ん坊の脳はあらゆる言葉に対応して、どんな言葉でも受け入れる態勢があります。1歳が終わったところで、赤ん坊の持っている語彙は、人によっていろいろですが平均50語ぐらいです。昔

の人は「三つ子の魂百までも」という諺を言っている。我々は、そういう諺を、昔の人が言ったのだから大したことないだろうと思って、意外に注意していないのですが、実は、3歳ぐらいで爆発的に語彙が増えます。平均800語ぐらいになります。多い子は1,000語です。少ない子供でも600語とかです。平均ですが、1歳で50語、2歳で200語となるんです。3歳で800語~1,000語ぐらいの言葉にパーンと増えます。

この言葉によって「自我意識の確立」といいますが、自分と他人がいるんだということに気づいていきます。赤ん坊にとっては、自分が世の中全部なわけですね。お母さんのおっぱいとか、多少外部がありますが、その外部さえみんな自分の一部だと思っているわけですが、言葉を覚えていくにつれて、よその人とか何とかとか、お母さんがしょっちゅういろいろ教えてくれますから、その言葉をもとに、自分は自分だということに、意識的というより無意識に気がついていくんですね。自我を確立していくわけです。最初の800語前後の言葉で自我を築くわけです。

さっき言った「三つ子の魂百までも」というのは、3つぐらいで言葉がグッと増えて、その言葉によって、自分とお母さん、お父さんはお母さんよりちょっと距離が遠いとか、あるいはお父さんが全然いないとか、そういう個別的なことを言っているときりはありませんが、とにかく自分と周りということを最初の言語の爆発で手に入れる。

それからどんどん言葉が増えていきますが、第二の爆発期、つまり小学校に入るちょっと前、これは5年間の実験のテープを回した結果、お終いの頃に起きてきた現象で、NHKはこれ相当重大なことであるというので、放送は5年でやめました。そのあとずっと15年ぐらいそのまま録音機を回し続けたということなんです。それで分かってきたことは、小学校に入る前に、もう一度爆発します。語彙がグーンと増えてくるわけです。そのときに起こることは、接続詞というのが一番最後に覚えるわけです。名詞、形容詞、やがて動詞、副詞、だんだんいろいろなものを覚える。それから一番最後に子供が覚えるのは、ちょうど小学校に入る前後、言葉がもう一段グーンと増えるときに、接続詞の中の順と逆の接続詞ですね。「どこそこへ行って、それからこうして、それからこうした」というそういう単純な接続詞のほかに、「こうだったけど、こうなんだよ」という、ひっ

繰り返す接続詞も覚える。

そして、13~14歳で人間の脳はほとんど8割方完成します。つまり、チンパンジーが生まれてきたときと同じ完成が、だいたい13~14歳ぐらいです。このときはほとんど脳が完成したといっているんですが、今でいうと小学校の6年から中学校の1~2年、このあたりにもう一回、語彙を一挙に覚えてしまう時期がきます。

最初は、堅くいえば「自我を確立」する。二番目には、接続詞とかそういうことを覚えて、ものを「考えていく」。思考する、推理する、考えていくというのが、小学校の前後に言葉の増加によってできるようになる。小学校で、勉強したり、友達と遊んだりしているうちに、もう一度一気に増える時期があって、それが小学校のお終いから中学校の始めです。中学時代といってもいいと思いますが、この時期にその人の脳は8割ぐらいでき上がるわけです。このときは「世界観」というのが発生します。たくさん言葉を覚えて、イタリアもあれば、フランスもあるし、こっちにはアメリカがあって、カナダがあって、ということをどんどん覚えてくる。それから太陽系……。実は、自分の家がある、それがどうやらある共同体の中にあるらしい、その共同体は日本ということになって、日本はアジアまでいきませんが世界の中のひとつであって、その世界というのは実は地球で、地球は太陽系の惑星であって、さらに太陽系は銀河に所属する。そういうある序列とか、そういうものを全部言葉で完成していくわけです。そうして初めて、世界観といいますが、この世の中どうもこういうことらしい、だから、自分はこういうふう生きていかなければいけないかなとか、そういうふう生きていこうとか、俺は運動が得意だからうんと運動をやるうとか、そういう過去と未来というのを完全に言葉で作りだせるわけです。世界はこういうふうできているらしい、油断のならない人ばかりだから、俺はそれの中でもっと油断のならない人間になってやろうとか、どうも世界はいい人ばかりで、自分が一所懸命やれば、それをちゃんと周りが受けとめてくれるから、俺はこれから一所懸命これをやろうとか、そういうふう世界観と未来が出てくるわけです。

これは全て言語の言葉の量が増えてくるにつれて、さっき言いました3つの段階があって、それで中学校の1~2年で脳は8割方完成します。そし

て20歳ぐらいまで少し増えていきますが、13~14歳ぐらいで大方のところは出来上がることが、NHKの大がかりな、といっても日本人の赤ん坊10人ですから、大がかりか、小がかりか分かりませんが、ほかの本も参考にしながら考えていくと、そういうことが言えると思います。

少年犯罪というのが、今いろいろ言われていますが、あれは明らかに第二の母親の胎内を私たちの社会がちゃんと用意してないということの証拠です。お父さんが悪い、お母さんが悪い、あたりまえですよ。おばあちゃんや、おじいちゃんも悪いんでしょうし、地域も悪いし、小学校も問題があるでしょうし、家の中に飛び込んでくるテレビやそういうものにも問題があるでしょう。それをひっくめて日本の社会、それから今の世の中、世界の置かれている状況、それが全部、彼にとってはお母さんの母胎、第二の母胎だったわけです。そこで彼は成長したわけですから、彼がああいうふうになったというのは、彼自身の責任ももちろんありますが、しかし、第二の母胎にも問題があったのではないかと、いうふうに私は考えているのです。

図書館はですね……。いきなり図書館に来ないと、これは図書館で話している意味がありませんので。図書館は第二の母胎の重要な一部です。ここには、人間がこれまで考えたことが集積されています。これは言葉で書かれています。いま言いましたように、言葉の増加というのが、人間にとって自我意識を育てるとか、ものを考える力をつけるとか、あるいは世界観をつくる。この世の見方を、いろいろな見方がありますが、それをとにかくつくる。もちろん体験であります。しかし、言語から見ると、語彙の獲得数によってそれができていくわけです。ですから、図書館というものの役割は本当に大事だというふうに、私は思っているのです。

ついでですから脳の話をもう5分ぐらい、そんなにかかりません、続けますと、20歳前後で脳は完全に成長を止めます。アナトール・フランスというフランスの文学者でノーベル文学賞をもらったと思いますが、この人は、平均1,400gのところを1,200gしかなかったそうですから、脳の大きさにはあまり関係はありません。夏目漱石の脳は、東大の本郷の医学部の廊下の狭いところにまだありますから、皆さん興味があったら見ていただきたいのです。脳のこのへんに「坊ちゃん」とか、いろいろ書いて、ない

ですね。そんなことはないんですが、あれは1,350gで普通の脳です。ですから、あまり脳の大きさは……、1,200g以上あれば大丈夫だというふうに専門家は言ってますが。

我々は、それぞれちゃんとした脳を持っているのですが、ご存じのように、成長したその瞬間から、脳は細胞が死んでいくわけです。1日10万個くらい死んでいく。大変だ大変だと、僕もあわてて計算したら、脳細胞というのは、ちゃんと数えた人はもちろんいません。厄介なのは、人間の脳の場合は動物実験ができないわけですね。外からは見えないし、解剖するときには死んでいるし、生きているときに解剖して調べられればいいのですが、そうももちろんいきませんから、よく分からないところがあります。正確に数えた人はまだいませんが、1,000億とか、とんでもない数の脳神経細胞というのはあるわけです。それが、ご存じのように、お互いに一つの神経細胞が何10万本という触手を出して隣のやつと、つながるといのは、べつに手を握り合うわけではなくて、そこに化学物質があって、怖いときには、ある化学物質が出てくる、それでつながり合う。そのつながりがあんまり強烈だと、つながったときの記憶が……。記憶を記憶している脳がまたあって、怖いときと時のことは、そのときのつながりに戻りますから、すぐ思い出すとかですね。あまり怖いと、それを意識して、その神経のつながりを断とうというまた別の働きがあったり何かして、いろいろ複雑のようですが、我々の脳が一日に10万ずつなくなっていくとすると、何年でなくなるのだろうと計算したら、人によっていろいろですけども、800年とかかかるらしいですから、まあ大丈夫です。人間の平均寿命が800歳ぐらいになると、ちょっとあぶないですが、どんなに長生きしてもせいぜい100歳ぐらいですよ。ですから、私たちは、脳が死んでいくということについて、まあ誰も恐れている人いませんが。

年とって、物忘れする、ボケるなんというのは、よく分かりますよね。どこか死んじゃって、そこだけつながらなくなっちゃっているんですね。僕なんかもそうですけど、「ああ、あれあれ、あの人」とか。僕も離婚したときに、道歩いていると、おばさんたちが4、5人来る。ヤバイなと思っていると、「あっ、これこれ、あれよ、ほらほら、このあいだ奥さんに逃げられた人、なんだっけ、なんだっけ」なんて。そうやって、大事なことが

パッと思い出せなくなるというのは、神経があるところプチンとなくなってますから、そこがなかなかつながらないということになっているのじゃないかと思います。

というふうに、いろいろ申し上げましたが、こんなことは、皆さん、この図書館でぴしっと勉強すれば、3日もあればすぐ分かることですね。

人間は、完全に成熟した脳をもって世界に生まれてくるわけではない。恐るべく未熟なままこの世に生まれてくる。そして、周りを第二の母胎として成長していくのだと。で、13~4歳ぐらいまでは、実はお母さんの胎内が必要なのである、ということは、皆さんどうか忘れずに。これは私の説ではなくて、さまざまな信用できる本を一所懸命読んだ結果、これは間違いないということを申し上げているわけです。

昔の花魁^{かゐ}ですね、つまり「お女郎さん」って、皆さん知ってますか？
その最上級というへんですけれども、吉原というのが昔ありまして、そこの花魁^{かゐ}といいますが、そこでいちばん位の高い太夫^{たゆう}の年なんか調べますと、だいたい13~14歳ですからね。今の少年・少女諸君というのはかわいそうなんですね。体は成熟しているんです。もう大人なんです。15歳で元服とか、昔やりましたが、もっとも大人になる時期が昔は早かったわけです。ですから、14歳で花魁の全盛期が来るわけです、18歳ぐらいまで。

今は事情が違いますから一概には言えませんが、私は一人の男性として、やっぱり10代というのは非常にきつかったのは、体は大人ですけれども、世の中が大人として扱ってくれないというところが、大変につらかった記憶があります。私だけの個人的な体験かもしれませんが。ですから、13~4歳ぐらいまでは、ほんとに周りがしっかり、母親の胎内代わりをしてやる。お母さんというのは、子どもが中にいるときには「あれしろ、これしろ」と子どもに言わないですよ。

この頃、音楽を聴かせたりなんかしている人がいますが、あれムダですね。あれはお母さんが落ちくのが大事で、胎児には何の影響もないわけです。まだ脳が動いていないわけですからね。脳の骨も重なってますし。お母さんが落ちつくためには、非常に効果があると思いますが。もちろん、お母さんのお腹にいるときに、外の音はものすごく聞こえるんですよ。

あるテレビ局のディレクターがいて、あるお母さんを口説き落として、子宮に特殊マイクを仕込んだ人がいまして、赤ん坊は外の物音をどう聞こえるかという実験をやっています。そのテープなどを聞きますと、外の音は大変ですよ。いろんな音が聞こえてきて、しかも相当大きく聞こえて、うるさいだろうなあ、お母さんのお腹の中にいるのは。それから、お母さんの心臓の音が、そばでドンドコやっているような感じで音が聞こえます。夫婦げんかなんかしたら大変ですね。いちばんうるさいのは赤ん坊でしょうね。

お母さんが精神がカッカしたり何かいろいろしますと、それは今度は子どもに影響しますから、お母さんが音楽を聴いて静かになるというのは、これはお母さんのためにはいいんですが、胎児教育というのは……。本当にインチキがかったことを考えて金儲けしようとしている人が、いかに大勢いるかということです。なんか、だんだん人に憎まれるようなことを言ってまして……（笑）

私が言いたかったのは、こういうことは全部、本に書いてあるということなんです。ですから、図書館が依然として、私なら私にとっての、ある母胎になっている。私は、図書館に入るたびに、ある守られた大事なところへ入ってきたという感じがします。昔は、その大事なところから、大事なところの一部分を持ち出したりなんかして……。それは、まだ少年の頃ですよ。私は孤児院にいましたから、孤児院の本をくすねて仙台の東北大学の前の古本屋に持って行って。大きくなってからはそれはやりませんし、本屋さんも買ってくれませんから。「明治大学図書館」なんという判子があるやつは買ってくれませんので（笑）、皆さんは、それはおやめになったほうがいいと思いますよ。

さて、こういうふうには、本によって私たちは……。私は、自慢じゃありませんが、助産婦は絶対できると思っているんです。あとは度胸の問題です。実地の体験はないにしろ、学科では……。

そういえば、自動車の試験ですけど、学科は毎回全部わかるんですけど、実地になると全然ダメでした。僕は、教習所に行くのは絶対に主義上いやだというので、実地へ13回通ったんです。この話をしてもいいんですけど、全然関係ないので……。そのときに、学科は必ず合格するんで

す。あれは、朝何も持たずに行って、学科試験と実地試験を受けて、夕方には免状を取って帰ってくるという非常に効率のいいやり方なんで、それを狙って、僕は千葉県にいましたけど、朝だいたい3,000人ぐらい並んでいるんです。その中から学科を通して、午後の実地も通る人というのは、これは恐るべきことに1人~3人です。3,000人、4,000人いてですよ。つまり、そういうことをちゃんと認めてしまうと、自動車教習所がつぶれてしまうわけですね。

僕に自動車の運転を教えてくれたタクシーの運転手は、トラックもバスも運転する人で、僕みたいな人に個人教授で運転を教えてくれるのですが、その先生がときどき様子みに試験を受けに行くんですね、実地で。そうすると、全部落っこってくるぐらい厳しいんです。

僕は、教習所に我慢ができなかったものですから、実地で取ってやろうというので行くと、学科は必ず合格する。学科が合格しますと、実地は2回受けられるんです。午後、ものすごい意地悪い、ギアを逆に入れておいて「はい、やりなさい」と言って、みんな上がっていますから、バツと発進すると、後ろに行っちゃったりなんかして、「はい、どうぞ降りてください」ってな(笑)。いろいろ向こうはものすごい意地悪をしかけてくるんです。実地のコース自体も、その日その日で全部違うんです。コースを分からずに、こう行きなさい、こう行きなさいと。その日のコースが分かれば合格できるんですが、分かるのは試験の直前に1回だけ連れていかれて、それだけです。ですから、13回通って、もうこれはダメだと思いついてね。それから、やっぱり自動車訓練というのはおかしいなと。

つまり、これ大変ですね。1年に1万人以上が事故で亡くなりますよね。阪神大震災で亡くなった方が6,000人でしょ。自動車事故が1日にいっぺんで起こってくれれば、事の重大さというのはみんな痛感すると思うんですね。21世紀になったら、自動車というのは、おそらく個人の運転は許されなくなってくると思っているんです。そうなるといいなと思っているんです。特に歩いている人間に「飛びだすな」とか、おまえは後から来て何いているんだ、ということとかいろいろ考えます。それは全部、免許が取れなかったせいなんですね(笑)。

きょう皆さんにお話したいのは、いろんな疑問があったときに図書館が

どれほど役に立つかというモデルケースをお話しようと思ったんですが、前置きが長すぎましたね。脳の話がちょっと長すぎて、ここから用意してきた話に入りますが、簡単に申し上げます。

インドが核実験をやりました。それで、パキスタンがそれに対抗して、やる、やらないと。一方、アメリカとかソ連とか、すでに核兵器を持っている国が「核実験けしからん」と言っている。もうほとんどマンガですよ。自分たちが、少しずつ減らせばいいじゃないですか。自分たちも減らして、世界はこうなるのだから、俺たちの努力を見てくれと。それを見て、もう核実験なんかできないだろう、というふうに言うのならともかく、自分たちは持っていて、新しく持とうとする国を批判する。日本政府も、アメリカには全然ものが言えないのに、ほかの国になると急にいきいきとして、ほとんどマンガで面白いんですが.....。

まず、誰が広島と長崎に原子爆弾を落とされたのか。原子爆弾って、皆さんご存じでしょ。8月6日の朝8時ちょっと過ぎですよ、B29が広島に潜入して、だいたい高度4,600mから爆弾を落としまして、地上560mぐらいのところで炸裂する。炸裂して1秒後から1秒間、そのときの火の玉の温度は1万2千度です。1万2千度と数字で言うと簡単ですけども、太陽の表面温度が6千度ですよ。あの太陽がちょっと近づくだけで、「きょうは暑いな、真夏日だな」なんてみんなフーフー言っているんですが、その太陽の表面温度が6千度です。ですから、1万2千度というのは、太陽2つ分が広島の上500mぐらいを1秒間、パッと現れたと同じことです。ですから、何もかも溶けますよね。しかも、その後の爆風、風圧というのは大変で、時速760kmというものすごいジェット旅客機なみの爆風。それから、爆発は1m四方に7トンぐらいの圧力でバーンと周りへ広がっていく。そうすると、溶けた瓦が一瞬爆風でパッと吹かれますから、みんな一斉に同じ方向へ、焼けただれてグジュグジュツとなったところがピュツと飛ばされてしまいます。皆さんご存じだと思いますが、みんな一方の方向へ突っ立っているのは、結局そういうことなんですね。

しかも、原子爆弾が普通の爆弾でないところは、ここからなんです。普通の爆弾ですと、亡くなった方ももちろん痛ましいですが、助かったほうは、やれやれ助かったと、もう一度頑張り直そうと思っているうちに、実

爆弾というか、あれを考えた人間というのはほとんど絶望的ですよ。

それを、なぜアメリカは日本に2発も落としたのか。誰だ、悪いのは、というふうに考える。これは当然アメリカの戦争指導者たちのやったことですよね。でも、それだけだろうか？というふうに考えていく。あれは太平洋戦争を早く終わらせるために仕方がなかったのだと、正義のために使ったのだというふうに、アメリカ人は言いますね。そうじゃない人はもちろん大勢いますけれども、大方は、あれは戦争を早く終結させるために使われたのであって、その意味では全く間違いではない、というふうにアメリカの世論は今でもそう言っています。一昨年でしたか、スミソニアン博物館で典型的な事件が持ち上がりましたが、アメリカの大方の意見はそういうことです。

ここで、アメリカが悪いのだと。もちろん悪いですね、許せないですね。あんなひどいことをやる人間は、人間の上に化け物みたいなものを落とすという、そういう人間は許してはあげないですよ。でも、それだけで終わるだろうか？というところから実は、図書館に入らなければいけない。そうすると、いろんな本がありますから、それを一所懸命調べていく。もちろん右がかった本、それから左のほうから物事を見る本、さまざまですけども、いろんな本を読んでいるうちに、だんだんと私たちにも正確なところが分かってくるわけです。

これは、図書館にこもれば、これぐらいの推理はできるという例で申し上げます。若い皆さんには、昔話だと思いますね。昭和20年（1945年）ですから、もう53年ぐらい前ですね。私は、その頃は小学生です。その頃は分かりませんでした。なぜ日本人はあんなバカな戦争をしちゃったんだろう？というのが私の生涯のテーマなんです。

これはけっこう多いんです。例えば、大野晋さんという学習院大学の国語の名誉教授で、もう退職なされましたけれども……。皆さん、辞書をお使いになったことあるでしょう。『岩波古語辞典』とか、『広辞苑』の国語の部分の解説を書いた方です。それから、丸谷オーさんってご存じでしょ。これは日本を代表する文学者ですよ。司馬遼太郎さんはもちろんご存じでしょう。この人たちにとってだって大問題なんですよ。

戦争の末期に、皆さん兵隊であっちこっちにいたんです。司馬さんは、

皆さんご存じのように、戦車隊に配属されていた。もし本土決戦という、アメリカが日本に上陸した場合……。今の若い人は、アメリカと日本が戦争したというのを全然知らない人もいますからね。「うそっ」なんて言う人いますから。したんです。そして、本土上陸に備えて、司馬さんの戦車隊は、満州にいたのが内地へ配置換えになって、それで上官に司馬さんが、もし上陸作戦が行われて、東京から避難民が逃げてきた場合に、自分たちは戦車隊ですから、東京へ迎え撃つために移動しなければいけません。が、「東京から引き揚げてくる日本人と我々の部隊がぶつかった場合にどうするんですか」ときいたら、「そんなのひき殺して行け」と、こう言ったというので、なんというバカな戦争だというふうに、そのとき司馬さんは考えたわけですね。いつからこんなバカな日本になったんだろう。もし、命長らえて、そういう機会があったら、いつから日本はバカになったか調べてみよう、司馬さんは、そう考えるわけです。

丸谷オーさんは、8名の戦車隊ですね。戦車は確かにあるんですが、寄っ掛かるとへこんじゃう。ベニヤ板に戦車の色を塗ってあって、中を見ると民間から徴集した自動車です。自動車に戦車らしい覆いをくっつけて、遠くから見ると戦車ですが、実際はただの中古自動車なんです。そこに鉄砲か何かを出しておいて、俺たちはこんな物でアメリカのすごい戦車と戦わなければいけないのか。戦うのはいいんだけど、こんなバカな戦い方をさせたのは誰だと。これは日本人にそもそも問題があるのじゃないか。ということ、戦車隊の少尉が何かで考えるわけです。もし、命長らえたら、日本人っていうのはどういうものか考えよう、というふうに丸谷さんは思う。

大野先生は、やっぱり同じように、こんなバカなことやってる日本人の使っている言葉に、日本語に問題があるのじゃないか。日本語で考えると、こうなってしまうのじゃないかということで、もし寿命があったら、日本語を勉強しよう。

今、大変な大学者や大作家になっている人たちというのは、ちょうどその頃、若い少尉が何かで、その場その場で「なぜ、こんなバカなことやらなければいけないのか」と。これは日本人の言葉のせいだろうか、日本人自体に問題があるのだろうか、それとも、昔はそうでもなかったとすれば、いつからこうなったのだろうか、というふうなことを考えて、戦争が

終わって社会に出てから、それをずっとやったわけですね。

我々もそうなんです。もっとずっと小さいんですけども、僕は、昭和20年の夏休みのことをよく考えるのです。7月の末に小学校が夏休みになります。黒板には「鬼畜米英我らも兵士」なんてなことを先生が書いてくれるわけですよ。夏休みの間に戦争が終わるわけです。そして来ると、黒板には「これからは民主主義だ」なんてなことが書いてあるわけです。これはもう情けないですよ。子供心にも「なんだこれは」と思いました。

つまり、私たち日本人というのは、ああいう「絶対天皇制」を受け入れるわけですよ。しかも、状況が変わると今度は、安直に、無節操に、無責任に「民主主義」を受け入れるわけですよ。その間に何も苦しまないんですよ。今、そのツケがドカーンと来ているので、いい機会だと、僕は思っているんですが、と言うと「この不景気が、おまえ、いいと思っているのか」と殴られますけど、そうではなくて、これは日本人のいいところかもしれないんですけど、これは問題点ですよ。だって、天皇陛下万歳、天皇陛下の命令に背くのは、死刑だとか、非国民だとか、夏休み前まで言っているわけですよ。夏休みが終わったら、アメリカ万歳、民主主義万歳って言っている。で、悪かったのは軍部だというふうに、軍部だけに責任を押しつけている。この精神構造というのは、信じがたいくらい安直ですね、安易ですね、無責任ですね。これはどうしてだろう？ というのが僕が今こだわっているところなんです。

原子爆弾の話に戻しますけれども、もうちょっとリアリズムで、いろいろな図書館で、年表やら、辞典やら、それについて書かれた物を調べていくと、だいたい次のような経過が分かってくるわけです。

つまり、アメリカが落としたのだ。それは分かっている。アメリカは、この事件の真犯人の一人なんです。しかし、これは単独犯かというところではないようなんです、調べていくと。例えば、昭和20年の初め頃から日本の宮廷グループ、つまり天皇を中心にした、近衛文麿とか、あとで首相になります鈴木貫太郎とか、天皇に近い人たち、宮廷グループが「このままでは日本は負ける」と。遅いんですよ、昭和20年にこんなこと言っているのは。遅いんですが、とにかく当時、中立条約を交わしていたソ連を通して、この戦争は終わらせなければいけないという画策をし始め

ました。これは皆さんちょっとお調べになればお分かりになりますが、つまり、このままいくとアメリカやイギリスに叩きのめされるより、国内の革命が恐ろしいと。アメリカやイギリスは天皇制を保持してくれるだろうが、革命はそれを許してくれない。ですから国内革命が.....、そんなの起こりっこないですね、日本人の精神を考えれば。でも、近衛文麿はそういうふうに恐怖心を抱いたわけです。だから、これを早く和平に持ち込んで、一つの条件だけ付けて戦争をやめたほうがいいと、宮廷グループの重臣たちがそういうような雰囲気でもとまったんですね。

ところがソ連のほうは、4月のヤルタ会談というのがありまして、ここでヨーロッパ戦線、つまりドイツと戦争が終わたら、「日本は降参しろ」という最後通牒をどこかで連合国側が日本に提示する。それを日本が蹴った場合には、ソ連も日本に参戦するという約束が、その年の4月にできます。こういう状況なんです。

日本にも、戦争をやめたいと思っていた人がいた。しかし、彼らの条件はただ一つ「国体の保持」です。天皇の身分の保障。もっと言いますと、大日本帝国憲法（明治憲法）の第一条に「大日本帝國八萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とあるんです。日本帝国の基本的な成り立ちは萬世一系の天皇がこれを統治する、というのが明治憲法の第一条です。つまり、宮廷グループは戦争をやめたい。しかし、この一条を譲ってはならない。この一条さえ認めてくれれば、逆に言いますと、いつでも日本は和平に応じるという条件で、ソ連と密かに交渉を始めます。

これはソ連を通して.....。4月にヤルタ会談をやっているわけですからね。それは、ソ連とアメリカとイギリスですから、日本がそういう条件を付けて、その一点さえ条件をのんでくれれば戦争をやめたがっている、和平を望んでいるというのは、アメリカも、イギリスも、みんな知っているわけです。

さて、その年の7月17日に、ドイツのポツダムというところで首脳会議が行われるわけです。トルーマン・アメリカ大統領、チャーチル・イギリス首相、それからスターリンです。中国は参加しておりません。17日から会議がずっと7月いっぱい続くんですが、その前の日に、実は原爆実験がニューメキシコ州のアラモゴードというところで成功している。

つまり、こういうことなんです。ポツダムというところは、「ポツダム宣言」というのが出てくると、皆さんご存じでしょ。ポツダム宣言を受諾すれば、この戦争は終わるとというのが、連合国側の最後通牒なわけです。ソ連から情報をちゃんと、アメリカも、イギリスも取っているわけですから、日本の国の成り立ちについては日本国民に任せるとか、あるいは天皇の身分は保障するということが、もし、この「ポツダム宣言」に入っていれば、日本は、あの時点で……。ポツダム宣言が日本に突きつけられるのは7月26日ですけれども、その26日の時点で、日本は喜んで和平に応じたと思います。天皇の身分は保障された、これだけが願いですから。

ところが、トルーマンとチャーチルは、それを入れると日本が降伏するので、それを入れないで「ポツダム宣言」を作ったわけです。なぜかという、チャーチルもトルーマンも、戦争をもっと続けたかったんです。もっと具体的に言うと、会議の前の日にできた原子爆弾を日本で使いたかった。

いずれにせよ、トルーマンとチャーチルと相談して、チャーチルが、実はそうしたほうがいいと言うんです。天皇の身分の保障については触れないほうがいいと。そうすると、日本は呑まないだろう。そしたら戦いを続ける理由が我々にできる。そして、原子爆弾を日本に落とすことができる。

なぜ落とすことが大事かという、向こうから見れば、この戦争はすでに終わったと同じですから、戦後の世界の経営において、今度はソ連とどう付き合うかという問題が残っています。その当時、ソ連もちょっと強引なことやってますから、ああいうソ連の跳ね上がりを抑えるには、原子爆弾というものすごい武器ができたということを切り札にしないと、それを武器にしないと、ソ連と付き合えないというふうに、アメリカとイギリスは信じ込むわけです。その2人の首脳は、ですから、天皇の身分の保障はわざと伏せて日本に突きつけた。

ソ連は、原子爆弾ができたということは知りません。ただ、ソ連はソ連で、さっき言ったヤルタ会談で、戦争が長引けばいいと思っているわけです。つまり、自分たちが参戦するまで、戦に加わるまで、せめて戦争が続いてほしい。なぜかという、自分たちが日本との戦争に参加することで、戦争が終わった後の戦果の分捕りですね。それをスターリンは考える

わけです。

戦争指導者とか国の指導者というのは、はっきり言ってろくなこと考えてないですよ。人々のため、なんて考えるやつは一人もいない。何か抽象的な、国のためとか、自由のため、平和のため、とか何か言いますが、実はそうではないんですね。

原子爆弾の開発というのは膨大ですから、やがてアメリカの場合は、必ず何でそういう無駄遣いの研究をやったんだというふうに……。

(あっ、もう時間ですね。もうちょっとで、1分ぐらいで話のかたをつけますけれど)

アメリカの場合は、秘書が電話でメモとったら、そのメモ用紙さえ、ちゃんとっておかないといけないわけです。これは日本、勉強しないとダメだと思います。税金でやったことは全て記録を残さないといけないわけです。公開しないとダメ。公開もいろいろ規則があって、70年間は秘密にしておくとかいろいろありますけれども、いずれにせよ、いつかは全てのことは公開される。このへんはアメリカの素晴らしいところですが、いずれにせよ原子爆弾を使わずに戦争が終わった場合、あの膨大な何だかわけの分からないことを研究したお金はなんだ、というふうに議会なり何なりで必ず問題になりますから、やっぱり作った以上は使わないといけないわけです。

案の定「ポツダム宣言」を、日本の当時の首相は鈴木貫太郎ですが、宮廷グループですが、これを黙殺します。「黙殺する」ということをラジオでしゃべってしまうんです。これはすぐ伝わりますから、おそらくチャーチルも、ルーズベルトも、喜んだでしょう。だって、爆弾をいよいよ使えるわけですからね。

ですから、犯人は一人ではない。チャーチルも、スターリンも、そしておそらく主犯格の一人が、やっぱり日本の戦争指導者なんですよ。

「日本臣民は天皇の赤子である」というのは昔は言った言葉ですが、「赤子」というのは赤ん坊です。可愛い可愛い赤ん坊だと、日本の国民は、天皇がおとつぁんですよ。それでみんな家族で、一人一人がかわいい大事な赤ん坊である、というのがたてまえですけども、実は、その本体というのは、天皇の身分の保障についてこだわって、結局は、そういう宣言

を黙殺する。もちろん天皇の身分保障が入ってないから黙殺するわけです。

そして、8月6日・広島、8月9日・長崎、同じ日にソ連が参戦してくるわけです。引き揚げの悲惨さ。今の中国残留孤児とか全て、そこから生まれてきているわけです。

だいたい、頼まれもしないのに、ひとの国に行って鉄砲を振りかざすのは良くないことなんです、いずれにせよ、こういうことを図書館でいろんな本を……。突然、図書館に話を結び付けるところがづらいところなんですけどね（笑）。

僕の考えはこうです。極端ですが、その国の指導者というのは、ほとんど全部この手合いですよ。自分たちのことしか考えていないんです。ですから、私たちは、絶えず注視して、監視していなければだめなんです。何をやるか分からないんです。

原子爆弾が一つのいい例だと思ってお話したんですが、指導者達はいろんないいことを言います。言葉の魔術をけっこう使うんですね、あの人たちというのは。それで、それが私たち自身の目的だというふうに錯覚して、我々も協力してしまいますけれども、原爆の投下問題ひとつにしても、みんなそれぞれの思惑で、誰も、その下で死んでしまう人のことなど考えていないんですね。後遺症で50年も悩んで、苦しんでいく人のことなど全然考えなくて、何か駆け引きだけで、武器といえないとんでもない物を使ってしまう。

これに対して、私たちは真っ向から対決しないとイケないのです。それは選挙もそうなんです。皆さんは、いわゆる無党派層でしょ。いい奴いないから投票に行ってもしょうがない。そうじゃないんですよね。それが実は、また世の中をつくっていくんです。無党派になる、無関心になるということ自体が、実はものすごい関心を示していることなんです。そうやって世の中が動いていくんです。

だから、ああいう指導者達を我々は監視して、私たちが持っている権利がありますね、投票する権利、それをできるだけ有効に使って、「おまえたち、そうやっちゃいけないよ」ということを絶えずチェックしないと、原爆で起こったようなことが起こりますよね。権力を持った人たちというのは、必ずこういう考えになりますから。

私たちは、うっかりしていると何されるか分かりませんから、政治、面白くないね、無関心だね、というのは本当に危険です。ああいうひとつの力を持った人たちが何しでかすかというのを、本気で警戒してないと、原爆までは行かないにしろ、さまざまなことで必ず彼らは自分たちの有利な……。日本の国のことなんか考えている人、いたらここに出てきてもらいたいです、ほんとに。そしたら、土下座しておわびしますが、そんな人ひとりもないと思いますよ。そういう気持ちはあっても、やっぱりどっかで、組織にいたりとかいろいろなことで、汚れてくるわけですね。これは人間の悲しさで、百パーセント国のためなんという人がいるわけでもありませんし、必ず何割かは、やっぱり生きていかなければいけない、家族のことも考えるということがありますから、そのへんは許すにしても、それ一色になっている人もいますから、そういう人は許してはいけません。

というふうに、図書館から、図書館のさまざまな資料によって、私たちは、さまざまに考えられる。あたりまえのことを結論にするのは、なにか申し訳ないのですが。つまり、外に打って出るときに図書館が根拠地になるということがあるんですね。図書館にまずこもって、さまざまな事を調べて、相手の立場も研究する、自分の立場も補強する。そうやって図書館を出て戦う。そして、疲れたり、迷ったりしたら、図書館に戻ってくる。つまり、お母さんの胎内に戻るように。そこでまた鍛えて、外に打って出るということのために図書館がある。というふうに私は考えています。

質問をいただくというお約束ですが、質問のしようもないでしょうと思いますが、どうしてもあるという方がいらっしゃったら、お一人ぐらい、質問を受けつけますが、一人というと絶対、手が拳がらないんですね。あっ、拳がりましたね、どうぞ。学部と、できたらお名前を。

|| 明治の人間ではないので、ちょっと……。手を挙げてしまったんですが。某大学の大学院で国文をやってまして、地口本を研究しております。研究というも気が引けるようなしろものなんですけど……。先生は、駄洒落にも造詣が深くていらっしゃるので、何かご存じのことがあったらおききしようかと思っておったんです。

井上氏 駄洒落についてですか。これは5分ぐらいかかるテーマなんですけど、大急ぎで言って……。どういことが分かりました。どうぞお座りください。

つまり、日本語の構造そのものが駄洒落に向いているということなんです。簡単に言いますと、日本語の音節数というのは140ぐらいしかないんです。「あいうえお かきくけこ」って50音ありますね。それに「しゃ」とか「しゅ」とか、いろいろ足すと、日本語ができています、つまりこれ以上分けられない、これで日本語はお終いという、例えば「はし」なんというのは、「は」と「し」に分けられますよね。じゃ「は」を分けてみると、ローマ字でいうと「h」と「a」で分けられますけど、発音上は「は」は分けられないですよ。そういう、これ以上分けられないという言葉の基になるものを「音節」というんですが | 「音素」という学者もいますが | 、それが日本語の場合は140個前後しかないんです。これはほんとに少ないんです。

日本語よりも音節数の少ない言葉で知られているのは、ハワイ語一つなんです。ハワイ語というのは「タ行」がないんです。「タ行」だったかな、何だか、音が80しかないんです。北京(漢語)は4,000ぐらいあるんです。400かな、4,000かな。英語は、まだ数えた人がいないんです。「dog」なんて、あれ1つの音ですからね。我々は「ドック」なんて3つにやっていますが、「dog」というのは1つの音ですから、英語というのは、どれだけの音節でできているか分からないし、数えてもしょうがないし、3万という人もいれば、いろいろ説があります。

日本語は、実に少ない音からできている言葉なんです。ですから、同じ音で似た言葉がたくさん出てくるのはしょうがないんです。例えば「シヨウカ」なんというのは、歌う「唱歌」もあれば、消火活動の「消火」もあれば、食べ物を消化する「消化」もある。昔、お女郎さんのいる家のことを「娼家」といいますし、「シヨウカ」と言っただけで、立ちどころに、同じ音で幾つかの意味があるわけです。「商科大学の学長が、娼家へこっそり入っていった。その家が火事になって消火活動が行われた」とか、「商科大学の食堂の食べ物は消化がいい」とか(笑)、簡単にできていくわけですね。音の材料が少ないのに、世界はほかと同じですから、同じ名前を

たくさん付けなければいけないわけです。ですから、日本は非常に駄洒落に向いているんです。

警視總監なんというのは、すぐに僕は「ケンシソウカン」とか、「キンシンソウカン」とかね。そうやると、あんまり警視總監、偉そうになくなりますよね。そうやって、偉そうな奴を駄洒落でくだらないようにして、手なずけるわけですね。扱えるようにするわけです。

それは江戸時代から日本人はずっとやってきた仕事だと思います。日本語は、駄洒落が、言葉遊びが非常にしやすい、そういう言葉なんです。ですから決して、駄洒落をいけないことだと言ってはいけないんですね。それは、日本語がいけないと言っているのと同じことになるわけです。

と、私は思って、一時期は駄洒落に励みましたけど……。今は、若い人が、真面目に立ち直って、真面目な芝居を書いていますけど、昔は、駄洒落だらけの芝居を書いた時期もありました。

で、一つだけお答えして……。前置きが長すぎたし、無理やり図書館にいろいろくっつけようという無理なところは、皆さんから見とれたと思います。いずれにせよ「図書館は第二の母親の胎内の一部」だということが大事だと、私は思っております。

どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

後藤 1時間半にわたって先生にお話をお伺いしました。最後に、井上先生が、図書館はまさに母親の第二の懐、胎内であるというふうにおっしゃっていましたが、人間の言葉の発声あるいは活動というものが、0歳から1歳では、わずか50の知識(言葉)を獲得するにすぎない、それが中学を卒業する頃にはほぼ完成をして、世界観というものまで獲得するようになる。人間は、チンパンジーとは違って、言葉、知識を、歴史を、そして世界観を獲得し、そして、これからどう生きていったらいいかということを獲得してきたのだと。

「学問とは、本を読むことなり」というふうに、我々も少年時代から教わってきたわけですが、その本を読むということの、いわばセンターが、まさに図書館であるわけです。皆さんの新しい人生を切り開いていく、人間をつくっていく、そして現代のさまざまな疑問にも問いを発して調べ、考え、そして実践をしていく。そういった人間が生きていく知の力を蓄え

るところが図書館であるだろう。そして、本であるだろう。

どうぞ、一年生、二年生の皆さんは、この和泉の図書館を、また駿河台に行っては駿河台の図書館を活用されながら、自分の書齋として、自分の人生をつくっていただきたい。

昨年、『本の運命』というご本を、体験上のところから書かれた井上先生をお呼びしての講演でございました。また来年には、新しい一年生を迎えて、図書館でどなたかに講演をいただいて、皆さんの心の糧にさせていただきたい。あるいは、してやろうかな、というふうに思っております。

きょうは、たくさんの皆さんが、一所懸命聴いてくださいました。どうぞ胸に刻んで、あしたからまた本を読んでください。ご苦労さまでした。

先生に、最後にお礼を申し上げます。「井上先生、ありがとうございました」(拍手)

(文責・生方卓)